

P2-043

若年者の再発翼状片手術・羊膜移植術に生理的組織接着剤を用いた1例

A case of recurrent pterygium surgery with fibrin glue in a young patient

矢島 夢実 やじま ゆみ 1, 小澤 紘子 1, 藤岡 俊平 1, 片山 泰一郎 1, 長谷川 岳史 1, 三田村 浩人 1

1. 川崎市立川崎病院

【緒言】再発翼状片に対する結膜弁移植・羊膜移植術では、通常結膜・羊膜ともに多くの縫合を行うのが一般的であるが、生理的組織接着剤(ペリプラスト®P)を用いて無縫合で翼状片切除術および羊膜移植術、遊離結膜弁移植術を行った症例を報告する。

【症例】18歳女性。小学校6年生時から翼状片を認めており、2021年5月に前医で翼状片切除術が施行された。再発を認めたため2023年3月に再手術を予定されていたが、転居に伴い当院紹介受診となった。初診時の視力は0.6（1.2×S+0.50D：C-2.25D Ax15°），翼状片は鼻側に厚い増殖組織を伴って角膜に侵入を認めた。2023年8月に翼状片切除術および羊膜移植術、遊離結膜弁移植術を施行した。翼状片切除後にマイトマイシンC（0.04%）を3分間塗布し洗浄した後、羊膜を結膜上皮欠損部全体にペリプラスト®Pで接着した。さらに遊離結膜弁を耳側上方結膜より採取し、羊膜上の鼻側輪部にペリプラスト®Pで接着した。手術終了時に治療用コンタクトレンズを装着した。術後羊膜・遊離結膜弁の偏位や脱落はなく、翼状片の再発も認めなかった。術後の視力は0.5（1.2×S-1.25D：C-0.50D Ax100°）であった。
【考按】本方法は縫合による従来の方法と比較し、縫合による疼痛のみならず、術後の縫合糸による肉芽種形成もないため、低侵襲で有用な術式であると考えられた。

【利益相反公表基準】該当無

【倫理審査】該当無 【IC】該当無

P2-044

深層層状角膜移植術の複数回施行症例に関する臨床的検討

Clinical study of multiple deep lamellar keratoplasty cases

原田 一宏 はらだ かずひろ 1, 川村 朋子 1, 内尾 英一 1

1. 福岡大

【目的】
深層層状角膜移植術(DALK)はデスメ膜と内皮以外のほぼすべての実質を移植する手法であり、内皮機能の維持されている角膜混濁や円錐角膜などに対し行われる。全層角膜移植術(PKP)に比べ移植片の生存率は優れているとされるが、種々の原因により術後に角膜混濁などが生じ、再手術が必要になることがある。今回、複数回のDALKを施行するに至った症例について検討したので報告する。

【対象と方法】
2006年4月1日～2022年6月31日に福岡大学病院でDALKを2回以上行った患者を対象とし、診療録に基づき後ろ向きに検討を行った。

【結果】
複数回のDALKを行った患者は10例（男性5例、女性5例）で平均年齢は48.6歳であった。原疾患は角膜ジストロフィーが2例、円錐角膜、再発翼状片、真菌性角膜炎、糖尿病性角膜炎、角膜火傷、遷延性上皮欠損、

帯状角膜変性、兔眼角膜上皮障害がそれぞれ1例であった。再手術の原因は血管侵入による角膜混濁が最多で、再DALK後の視力は

有意な改善を認めた。2回目の手術までの期間は平均1195±1408日であり、合併症は白内障が5例と最多であった。2回以上のDALK

が必要になった症例は1例であった。

【結論】
DALKの再手術は多様な疾患で必要となるが、術後視力は良好であった。拒絶反応等のリスクも考慮し、DALKが再度可能な状態であれば2回目の手術以降もDALKを行うことが望ましいと考える。

【利益相反公表基準】該当無

【倫理審査】承認有 【IC】取得有

P2-046

後部多形性角膜ジストロフィーに対する水晶体再建術併用眼内ドレーン挿入術の1症例

Cataract surgery and iStent in posterior polymorphous corneal dystrophy

中川 卓 なかがわ すぐる 1, 石井 清 1

1. さいたま赤十字

【緒言】後部多形性角膜ジストロフィー（posterior polymorphous corneal dystrophy, PPCD）では、乱視や角膜混濁による視機能低下が報告されている。PPCDを有する眼に水晶体再建術併用眼内ドレーン手術を施行したので報告する。

【症例】78歳男性。202X年に緑内障に対して極小侵襲緑内障手術（以下MIGS）目的に当院紹介。両眼に帯状の角膜病変を認めた。内皮細胞密度は2983個/mm²/ 2871個/mm²（右眼/左眼）、角膜中心厚は581μm/ 572μm、Vd=(0.7×+0.5D=cyl-4.5D Ax80)、Vs=(0.3×-0.75D=cyl-4.0D Ax100)。両眼共に2.4mm角膜切開によるPEA+IOL施行後、下方と下鼻側の腺維柱帯にiStent inject® Wを挿入する際に、隅角の視認性の低下が見られた。
術1週間後、角膜中心厚は614μm/609μmと軽度の角膜浮腫を認めた。Vd=(0.5×+3.5D=cyl-4.5D Ax90)、Vs=(0.4×+4.5D=cyl-7.0D Ax85)と術前に比較して左眼の乱視度数が増加していた。右眼は前面・後面の高次不規則成分と後面の正乱視、左眼は前面・後面の正乱視・高次不規則成分と後面の非対称成分が増加していた。
【考按】
PPCDに白内障手術を安全に施行できたという報告はあるが、PPCDを有する眼でのMIGSは、本症例のように①隅角鏡の視認性が通常より悪い、②術後の角膜乱視変化が大きい場合があり、術後早期の視機能に関して注意を要すると考えられた。

【利益相反公表基準】該当無

【倫理審査】該当無 【IC】取得有

P2-047

Evaluation of two anterior segment optical coherence tomographs in keratoconus

難波 広幸 なんば ひろゆき 1, Sukhee Nomuundari 1, 吉田 絢子 2, 臼井 智彦 1,2

1. 国際医療福祉大・成田, 2. 国際医療福祉大・三田

【Purpose】The aim of this study was to evaluate whether there are differences in the examination results obtained by two AS-OCT devices in keratoconus (KC) and normal eyes.
【Methods】We recruited 24 eyes of 15 KC participants who visited the International University of Health and Welfare Narita Hospital from May 2023 to September 2023. They were examined with two AS-OCT devices, ANTERION® (Heidelberg Engineering) and CASIA2 (TOMEY Corporation). The tomographic parameters of the anterior and posterior corneal surfaces, and corneal thickness were measured. Age- and sex-matched participants with normal corneas were also included as a control group. Data were statistically analyzed using linear mixed models.
【Results】Similar results were presented and no significant differences were found between the two devices for anterior and posterior tomography in both control and KC participants. The instrumental difference in the thinnest corneal thickness was greater in KC patients ($p=0.008$), indicating a thinner cornea in CASIA2.
【Conclusion】Tomographic measurements were similar in ANTERION® and CASIA2. In KC patients, the corneal thickness may possibly be unstable.

【利益相反公表基準】該当有

【倫理審査】承認有 【IC】該当無